

山口県長門市旧深川地区に於ける待遇表現の諸相

補助動詞・助動詞的要素による尊敬表現

藤田 勝良

1. はじめに

待遇表現は、諸氏により、様々な把握のされ方がなされ、それに伴って表現形式の分類も種々になされている。その場合、話者をとりまく何らかの人間関係を取り入れる形でこれを把握する事になるのは共通しており、例えば、辻村氏（辻村1968）も、「話し手・聞き手・素材の3者間の尊卑・優劣・利害・親疎等の関係に応じて変化する言語形式」という把握の仕方をされている。この把握では、傍線部が人間関係である。こうした把握は、観察を通して帰納される妥当なものであろう。しかし、藤原氏（藤原1978）がいわれるような、ていねい法化の現象は、これでは、扱いきれない。ていねい法化は、傍線部で示される様な“人間関係”への話し手の志向が、“話しの場”への直接的な志向へと変化することであり、その契機としては、聞き手志向の強まりが考えられる。

小論は、一方言における待遇表現の実態の記述・考察を目的とするものであるが、その記述においては、この志向性に注意をおき、その表現法から、尊敬表現として分類されるもののうち、述語部の補助動詞的要素について述べることにする。

2. 調査地区の概観

旧深川地区は、日本海に面した、山口県西北部に位置する長門市の中にある。この地区は、旧区分のうちの1つの地区であり、宗教・行事様式ともに、ほぼ地区内は統一されている。一方、言語地図によれば、音声現象その他において、分布の重なる地域となることが判る。例えば、[ai] 連母音の融合化現象の分布図を見ると、同地区においては、[ɑ:] となるものと、[æ:] となるものが混在している。^(注1)（他地域においては、[ɑ:] 或いは、[æ] 或いは、[ai] のいずれか1つしかあらわれない）。また、体言に続く指定の助動詞も、山口県下においては、この地区と、その周辺においては、ジャとヤが混在することが判る。即ち、ダメヤ<だめだ>と、ダメジャ<だめだ>が、混在している。また文末詞についても、北部に分布するドナ・ナ

と、南部に分布するノ・ネ・ノンタが、混在している。^(注2)この様な言語要素の重なりは、待遇表現に、何らかの影響を与えるのではないか。この点も、1つ留意しておきたい点である。なお筆者は、調査地区の出身である。

3. 資料・記述

○記述にあたり、筆者は、次の3つの資料をまとめて分類カード化した。

資料1：同地区での自由会話の録音文字化資料（30分テープ・被調査者2名）

資料2：同地区での自然傍受法による調査資料（被調査者9名）

資料3：同地区での質問紙法による調査資料（被調査者3名）

これらの他に、岡野氏（岡野1979）の調査資料も参照した。（同氏の資料を掲出する場合は、※で示した。なお、これら1～3の資料のインフォーマントの年齢層は、1980年現在で、60歳～90歳である。

○方言の音声は、片仮名で示した。アエ・クエは、ほほ [æ]・[tæ] に相当する。クイは [k^(注3)ui] に相当する。コエは、[kø] に相当する。いずれも一音節を示す仮名である。

○資料提出の際は、話し手と聞き手を表すために、矢印の左側を話し手とし、矢印の右側を聞き手とした。

一補説一

待遇表現を記述する前に、この記述に深くかかわる、同地区に特徴的な音声現象を次に3点指摘しておく。

(1) [e] の狭母音化

[e] は、一般的に狭く、[i] 音に近づいているものが多い。或いは、[i] 音に転じることもある。

（例）

● [Fune:] → [Funi:]（船に）

● [nannen] → [nappin]（何年）

(2) [r] 音脱落

[r] 音脱落現象も顕著である。[r] 音のみならず

[ra] 音節全体が落ちているものもある。

(例)

・ [sora: tfigau jo:] → [soa: tfigau jo:] (れは違
よ)。

● [jakara] → [jaka:] (だから)

(3) [ai] 二重母音の変化

2. で述べた様に, [ai] 二重母音は, [a:] 或いは,
[æ:] となり, 時には, [e:] ともなる。

(例)

[a:]

● [naikedo] → [nakedo] (ないけど)

● [arai] → [ara:] (荒い)

[æ:]

● [nai] → [næ:] (無い)

● [nikai] → [nikæ:] (2回)

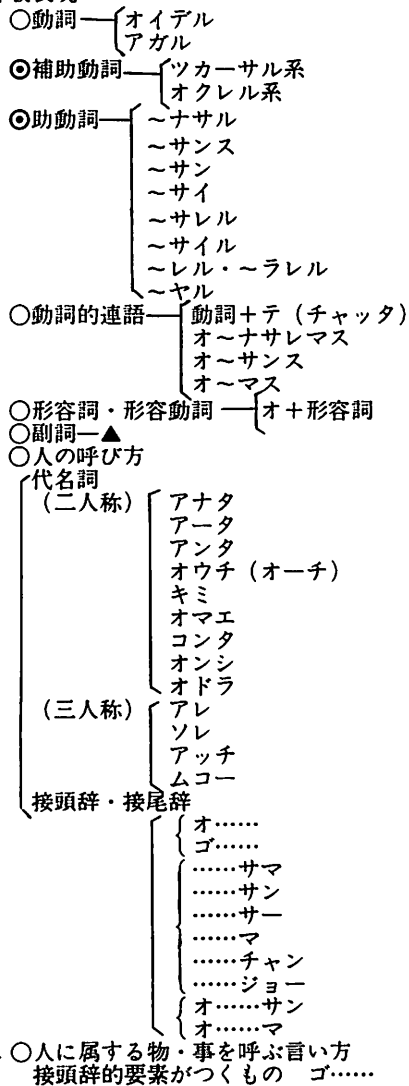
[e:]

● [ippai] → [ippe:] (一杯)

4. 調査地区における待遇表現体系

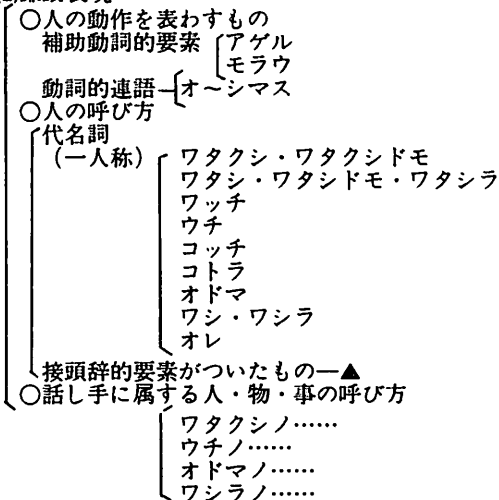
南不二男氏ら(注4)の, 表現法を基準にした, 共通語での
分類に準じて, 調査地区の待遇表現体系を図式的に表

(1) 尊敬表現

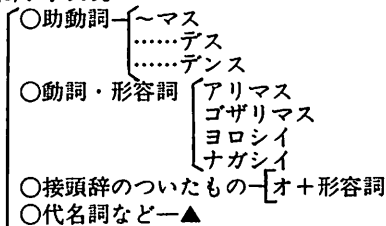


わすと次のようになる。^(注5) 今回は, このうち, ◎印で示
した項目について記述・考察をする。

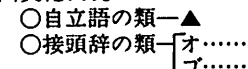
(2) 謙讓表現



(3) 丁寧表現



(4) 美化表現



説明) ▲は, 今回の調査では, 該当するものが現わ
れなかったことを示す。~は, 動詞連用形, …
は, 体言に相当するものを示す。また, 二人称
人称代名詞の様に, 多くの待遇段階と, それに
対応する語を有するものについては, マイナス
段階に至るまで掲出した。また, 特定の要素が
付加するか, 否かで, 二段階の待遇段階をなす
場合は, 付加する特定の要素のみを掲出した。

5. 表現形式と志向性

5. 1. 補助動詞の要素

補助動詞的な要素としては、「ツカーサル」・「オクレル」を、あげることができる。これらは、いづれも接続助詞「テ」を介して、動詞の連用形に下接する。また、いづれも、高める対象の動作について、「上の者から下の者へと利益をもたらす」という意味を付加することにより、動作主を高める。これは、山田孝雄氏の造語であり、辻村氏(辻村1968, 1977)の用いられる「関係敬称」にあたるものである。資料では、依頼表現において多用されている。

5. 1. 1 「ツカーサル」

「ツカーサル」は、本資料中では、「マス」を下接させて、「ツカーサイマス」(「ツカーサレマス」の^レのr音脱落・[e]の狭母音化；3の補説参照)となったものや、これが、更に変化したものと思われる「ツカーサンス」の形で用いられている。

([tsuka:saremasu] > [tsuka:saimasu] > [tsuka:sansu])。

方言文例には、次の様なものがある。

- (1) ヨロシユー シンパエー シテ ツカーサイマセ (よろしくお世話ください)。<老女→地主の設定>
- (2) タベテ ツカーサンセ (食べてください)。<老女→筆者>
- (3) オネガエー シマス ドーゾ シンパエーシテ ツカーサイマセ (お願いします。どうかお世話くださいませ)。<老女→校長の設定>
- (4) ^{*}コンド アナター チョット シマデホン ミセテ ツカサンセ (今度あなた、ちょっと稿手本を見せてください)。<村の人→老女の設定>

これらの文例によって、「ツカーサイマス」と「ツカーサンス」とを比較してみると、その動作主が、前者は地主、校長であるのに対し、後者は、同じ村の出身である筆者と、村の友人であることから、前者の方が高い待遇値を持つものであり、後者は、ややくだけた言い方であると思われる。

なお先述したように、「ツカーサル」は、依頼表現で多く使用されており、恩恵表現的色彩を濃く残すものといえよう。

5. 1. 2 「オクレル」

「オクレル」も、依頼表現に多用されている。

- (5) アンター チョット キンコー ミセテオクレ (あなた、ちょっと金庫を見せてください)。

<税務所員→店の事務員の設定>

- (6) アンター モドッテ オクレ (あなた、戻ってください)。<店の事務員→店長の設定>
- (7) ^{*}オシエテ オクレテ ユータ(魚屋に符丁を) 教えてくださいといった)。<老女→老男>

これらの方言文例にはないが、後に「マセ」を下接して、「～テオクレマセ」(～してください)と使用されることも多い。「オクレル」の待遇値は、人称代名詞(二人称)との対応(「アンタ」に対応。二人称の人称代名詞は待遇値の高いものから「アナタ」、「アータ」、「アンタ」、「オウチ」……となる)からみて、裸の形で用いられる場合、それ程高いものではないようである。

5. 1. 3 補助動詞の要素の志向性と待遇値

さて、この「ツカーサル」、「オクレル」は、いづれも話題中人物(話者と聞き手以外の第三者)の動作については、用いられていない。もっぱら聞き手志向性を有する表現形式といえよう。この2者の体系を整理してみると次の様になる。

| ← 待遇値 → | | |
|----------|--------|--------------|
| (対校長・地主) | (対村人) | (対村人・友人・身ウチ) |
| ツカーサイマセ | ツカーサンセ | ツカーサレ |
| オクレマセ | | オクレ |

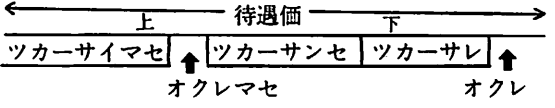
これをみると、「ツカーサル」の系列と、「オクレル」の系列が同様の待遇値で併存していることが判る。もっとも、「ツカーサル」系は、老年層を中心として聞かれる語であるが、「オクレル」系も老年層によく聞かれることからすると、単純な旧から新への過渡的現象としてとらえてよいものではないであろう。この併存状況については、ツカーサイマセの転訛形であると思われるツカーサンセが注目される。もしもこの併存状況が「ツカーサル」系への単純な新旧交替現象ならば、「オクレル」の系列に於て、これと対応する要素が欲しいところである。然るに「オクレル」の系列にそういった要素は、見当たらない。筆者は、この併存的状況について、時間的な視点から眺めるよりも、空間的な視点から眺める方が正しい把握がなせるのではないかと思う。というのも萩市方言(岡野1969)において授受動詞に「ツカーサル」系の頻度が高いのに、下関市彦島(上田1980)においては、「ツカーサル」系は見えず、「オクレル」系のみが見えているからである。(図1参照)



図1

そして、その日本海沿岸の中間地点である当方言においては、「ツカーサル」系と「オクレル」系が併用されているのである。こうしたことから、1つの可能性として、当方言における併存状況は、そうした分布の交錯地域という位置が産み出したものと、とらえられるのではないかと思うわけである。

また、2者の待遇価を、使用対象から詳細に観察すれば、「ツカーサル」が上方に、「オクレル」が下方にズレを生じていることが分る。こうした結果、もっぱら聞き手志向性を有する授受表現の待遇表現体系は、次の様に5段階の待遇段階を見ることができる。



5. 2. 助動詞的要素によるもの

助動詞的な要素によるものには、極めて多彩な種類がみられる。藤原氏（藤原1978）に従って、これら助動詞的要素を系列化すると、「ナサル」系、「レル」・「ラレル」系、「ヤル」系に大別される。当域は、このうち、「ナサル」系の助動詞の変化形が極めて多いことが特徴である。

ここでは、それぞれの系ごとの存立状況を、「ナサル」系から述べていくことにする。

4. 2. 1 ナサル系

ナサル起源と思われるものとしては、「ナサル」・「サンス」・「サイ」・「サン」・「サレル」・「サイル」が、あげられる。

① 「ナサル」

「ナサル」は、かなり高い待遇価を有する文において用いられている。もっとも、「ナサル」単独で使用されている例は無く、必ず後に「マス」を付加させている。（使用文の待遇価の高いことは、使用対象が、校長・お寺の奥さんなどである事や、二人称人称代名

詞で最も待遇価の高い「アナタ」が同じ文中にあらわれることから判断される）。

- (9) ドッチー オイデナサレマスカ （どちらに、いらっしゃいますか）。〈老女→校長の設定〉
- (10) アナター ドッチー オイデナサレマスカ （あなた、どちらにいらっしゃいますか）。〈老女→お寺の奥さんの設定〉
- (11) オイデナサレマセ（いらっしゃいませ）。〈老女→筆者〉

これらを見て注目されることは、すべて、「オ+動詞+ナサル+マス」の重層的尊敬表現がなされていることである。この事情は、岡野氏の資料（岡野1979）をみても変わらない。即ち「ナサル」は、常に、「オ～ナサレマス」の形の中で使用されている。（～は動詞連用形）。ところで、当域では、「オ～マス」の形が存在しており、たとえば、「オイデナサレマス」ではなく、「オイデマス」の方言用例が見られる。とすれば、「ナサル」が、これらの「オ～ナサレマス」という形式を要求するものであるという見方より、「オ～マス」という形式に「ナサル」が付加されるという見方の方が妥当であろう。こうした付加は、「オ～マス」の形式によってもなお、その待遇意識を充分表現しきれない時に、なされるものであろう。ちなみに、「来なさい」のヴァリエーションは、次の様なものとなる。

| 待遇 | 語形 |
|--------------------------|------------------------|
| 疎 ↑ あなた ↑ まり | オイデナサレマセ (オイデナサイマセ) |
| | オイデンサレマセ |
| | オイデマセ |
| | キーサエー |
| | オイデ |
| ↓ 親 ↓ だけ | |

さて、この「ナサル」を核として、様々な変化形が派生しているのであるが、ここでは、まず、専ら命令・勸奨表現として用いられている「サンス」・「サイ」・「サン」から述べて行くこととする。

② 「サンス」

「サンス」は、[nasaremasu] > [saremasu] > [saimasu] > [sansu] の如き変化を経て生じたものであると思われ、「ナサレマセ」よりは、待遇価は低く、より親しみのこもった表現となっている。その使用対象は、身ウチの者を除いた残りの、話し手が属する村落共同体（旧町・村）の者である。

- (12) ヨーシャー ナエー オトイサンセー（遠慮はいらぬ。聞いてください）。〈老女→筆者〉

(13) セツピトーシ シテ ミーサンセ (設備投資を
して御覧なさい)。<老男→老男>

(14) タベテ ツカーサンセ (食べてください)。<老
女→筆者>

「サンス」は、「～サンセ」とした命令形が見られる
一方、その禁止表現として、禁止を表わす終助詞「ナ」
を接続させて、

(15) ミーサンスナ (見なさるな)。

(16) タベサンスナ (食べなさるな)。

の様に言うのも日常さかんである。これもその原型は、
「ナサレマスナ」であり、これが [nasaremasuna] >
[nasaimasuna] > [sansuna] と転じたものである
と考えられる。

㉔ 「サイ」

「サイ」も「サンス」同様、命令・勸奨表現として
存在するが、「サンス」や、次に述べる「サン」と相
違える点は、禁止の終助詞「ナ」を接続させて、禁止
表現をなす事ができない点である。即ち、

(17) *ミーナサイナ (見なさるな)

の様な表現は、不可能で、こうした表現は、むしろ、
「見なさいよ」という意味となる。「ナ」は、この場
合、禁止の終助詞としてではなく、丁寧の終助詞とし
て、とらえられるのである。「サイ」の方言文例とし
ては、次のようなものがある。

(18) ヌギサエー ヌギサエー (お脱ぎなさい。お脱
ぎなさい)。<婿→義父の設定>

(19) オマエー イサエーノ (お前が言いなさいよ)。
<姑→嫁>

「サイ」の待遇価は、その使用対象が義父や嫁であ
ることから、或いは、内省によっても、かなり低いも
のといえ、いわば、身ウチに対して用いられる程度の
表現といえよう。なお、方言文例においても見られる
ように、[ai] 連母音の融合化現象が、この「サイ」
にもあらわれて、「サイ」は、「サエー」として用いら
れる方が、普通である。

㉕ 「サン」

「サン」は、「サイ」の変化形であるとして説明され
ているが、^{〔注11〕} 当域の調査からは、「サンス」からの変化
と考えた方が妥当であると考えられる。その根拠は、
「サンス」・「サン」の形態が類似しており、「サンス」
→「サン」の変化([su] 音節の脱落)を想定する方が、
「サイ」→「サン」といった変化を想定するよりも自
然であるということと、禁止の終助詞「ナ」が、「サ
ン」・「サンス」には接続して禁止表現たり得るのに、
「サイ」は、こうした禁止の終助詞「ナ」の付加によ

る禁止表現は、不可能であるという2点である。^{〔注12〕} ただ
ここで問題は、この3者間の待遇価は、それぞれ、ど
の程度のものなのかという点である。「サンス」と「サ
ン」の待遇価がかけ離れていては、この仮定は成立し
ないからである。

これを、まず、「サン」の方言文例をみた上で検討
することにする。「サン」の方言文例としては、次の
様なものがある。

(20) マチサン ヤー チョット カンガエテ ミン
ニヤー ワカラン (待ってくださいよ。ちょっと
考えてみないとわからない)。<老男→筆者>

(21) ゼニー クレサン イノー^{〔注13〕} (小遣いを、ちょ
うだいよう)。<娘→父親の設定>

(22) イッテ キーサン (いってらっしゃい)。<嫁→
姑>

使用対象をみると、「サン」は、身ウチの者や、村
の者であり、「サンス」に比して、ややくだけた表現
としてあることがわかる。ここで、「サンス」、「サン」、
「サイ」の待遇度を、その使用対象から述べてみると、
「サンス」は、「サン」のように身ウチの者に対して
用いる事ができない点で、「サン」よりは高い。そう
して、この2つに共通であるのは、その使用が、村の
人に可能であることである。一方、「サイ」は、その
使用が、身ウチの者に限られている。身ウチの者に用
いられる点では、「サン」も「サイ」と共通している。
要するに「サン」は、「サンス」と「サイ」の中間的
な待遇価を有している。それ故、「サンス」の簡略形
とみるのも、「サイ」の変化形とみるのも、いずれも
一応可能である。ただ、「サイ」から「サン」が生じ
たとするのは、転訛形により待遇価が上昇すること
になり、これは想定しにくい。また使用対象の大幅な
拡大を認めなければならない。これに対し、「サンス」
から「サン」に転訛したとするならば、待遇価が「サ
ン」において下がっているのも説明可能である。以上、
待遇価からも、「サンス」→「サン」の変化の想定は
妥当であると思われる。

さて、系統的な問題は、一応ここにおいて、そうし
た結果としてナサル系の命令・勸奨表現の諸形式それ
ぞれが持っている待遇価の関係を、先述した「ナサレ
マセ」(「ナサイマセ」)をも含めて、ウチ・ソトとい
う観点から図式的にあらわしてまとめてみると、次のよ
うになる。

図2

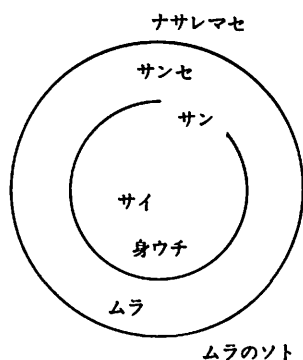


図2の説明) ここでのムラとは、調査地区内のそれぞれの地点をさすもの。また「ナサレマセ」を、ムラのソトに置くのは、その使用対象をみると、柴田武氏(柴田1973)が、いわゆる村落共同体から除外されていると指摘されるところの、地主やお寺の奥さん、校長と、まさにアウトサイダーたる見知らぬ紳士に限られていることによる。

この図から、社会構造は、必ずしも「サン」を必要としないことに気づく。即ち、ウチ・ソトの境界を図2の様に設ければ、それに応じて、「サイ」、「サンセ」、「ナサレマセ」があれば十分である。この点と、先の「サン」の系統問題を、あわせてみると、ムラの中に限っていえば、「サン」が略形として使われる以前には、「サンセ」と「サイ」の2本立てで、それぞれの範囲を明確に有していたものと思われ、そこに「サン」が、「サンセ」の略形として割りこんできて、両者の境界をあいまいなものにしているのが、現在の状況であると思われる。

何故こうした「割りこみ」が起るのか? 勿論、前述したように社会構造上の要諦とは思われない。

1つの説明として、「サン」は丁寧語だとすることが考えられる。しかし、辻村氏(辻村1968)がいわれる〈丁寧表現形式は、既存の尊敬語、或いは謙讓語から転成する〉という原則を適用すれば、「サンス」か「サイ」のいずれかが、そのまま丁寧語として転じ、その代りに別の要素が新しくその位置に入る方が自然である。

それでは、一体どの様な説明が可能であろうか。筆者は、これを、2.で述べた言語要素の重なり起因するものではないかと考えるが、これは、まとめて改めて述べることにして、ここでは、「サンス」・「サン」・「サイ」に関する限り、待遇表現として身ウチとムラ

という社会的な2段階の構造に対応するだけの表現で充分であるのが、3段階へと変化しているという事実を、おさえておきたい。

さて以上、命令・勸奨表現として、専ら聞き手志向性を有するものをみたが、次に、聞き手のみならず話題中人物に対する表現形式としても存在する「サレル」と「サイル」についてみていきたい。

㊦「サレル」

「サレル」の使用対象は、村の者に限られていて、待遇価は、それ程高いものではない。

(23) コズカエー クレサレー (小遣いを、頂だい)。

〈娘→父・母の設定〉

(24) フジタニヤー ソネーニ ハゲシューモ ヤリ

サレン (藤田さんは、そんなに激しくもやりなさらない)。(村人どうしの会話)

(25) ムコーノ オヤジサン イヤー シーサレン(向

うの義父は、言いはしなされない)。(老男→筆者)

(26) オマエー オリサレンニヤー ワタシャー ド

ネー スル ノー (あんたがいないと私は何をしようか)。(息子→父の設定)

(27) コノ カーチャンモ シツチヨリサリョーガ(こ

の嫁も知っているだろうが)。(老女→筆者)

㊦「サイル」

「サイル」の待遇価も高くない様で、土地人は、「丁寧な言葉ではない」という。使用対象は、「サレル」同様、身ウチの者や、村の人を中心としている。

(28) アスコノ オトサン シニサエータエーナー (あ

すこの御主人は、死になすったよね)。(嫁→姑)

(29) オマエー ドケー イキサエール ノ(あんた、

どこに行くの?) (妻→夫の設定)

(30) ソレガ ツクリヨリサエータ (その人がつくっ

ていなすった) (老男→F)

(31) イワミーデスカ テツドー デーサエール(岩

見さんですか。鉄道に勤めていなさる)。(老男→老男)

(32) サエーキサング オリサエーラ (左伯さんが、

いらっしやるよ)。(老男→筆者)

さて、補説で述べたことから、サレル→サイルが想定できるが、両者の活用を方言文例から抽出してみると次の様になる。(仮定形は、用例が得られなかったので、筆者の内省によって補った)。

| | 未然 | 連用 | 終止 | 連体 | 仮定 | 命令 |
|-----|----|-----|------|------|-----|-------|
| サレル | サレ | サレ | × | × | × | (サレー) |
| サイル | × | サエー | サエール | サエール | サエー | サエー |

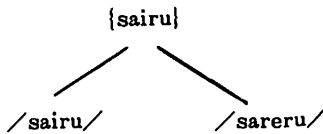
(サレーは、日常あまり聞かない。)

また、連用形に於ては、「サレル」が「マス」・「ヨウ」を後接するの、「サイル」は、これを後接せず、逆に、「サイル」が「タ」を後接するの、「サレル」は、これを後接しないことから、この事実を加えると、次の様になる。

| | 未然 | 連用 | | 終止 | 連体 | 仮定 | 命令 |
|-----|----|-----------|-----|------|------|-----|-------|
| | | マ ス・ヨウ | タ | | | | |
| サレル | サレ | サレ | × | × | × | × | (サレー) |
| サイル | × | × | サエー | サエール | サエール | サエー | サエー |

この表から、「サレル」と「サイル」が命令形を除いて、相補的關係をなしている事が、わかる。そうすると、この2者は、「サレル」→「サイル」という関係で対立的に存在するものではなくて、同じ表現形式としてとらえる方が、妥当なのであろうか。筆者は、この表の状態は、固定的なものというよりも、むしろ、「サレル」→「サイル」の変化の一段階(一過程)を示すものとしてとらえられるのではないかと思う。当方言の特徴である[r]音脱落現象と[e]母音の狭母音化は、無視し得ないものだからである。(おそらく「サレー」は、将来、「サエー」に一元化されるものと思われる)。

しかしまた一方、現在においては、仮定形・命令形を除いて、相補的な関係を見せている事も事実である。筆者は、これらを勘案して、この2者を、一応次の様にまとめようと思う。



即ち、{sairu}を、/sairu/と/sareru/の上に仮定して、しかもその{sairu}の内部の様相は、なお変動の可能性を持つものとするのである。以後、「サイル」と表記して{sairu}の意で用いる。

(補注)

しかし、この様に処理する上で1つ問題点がある

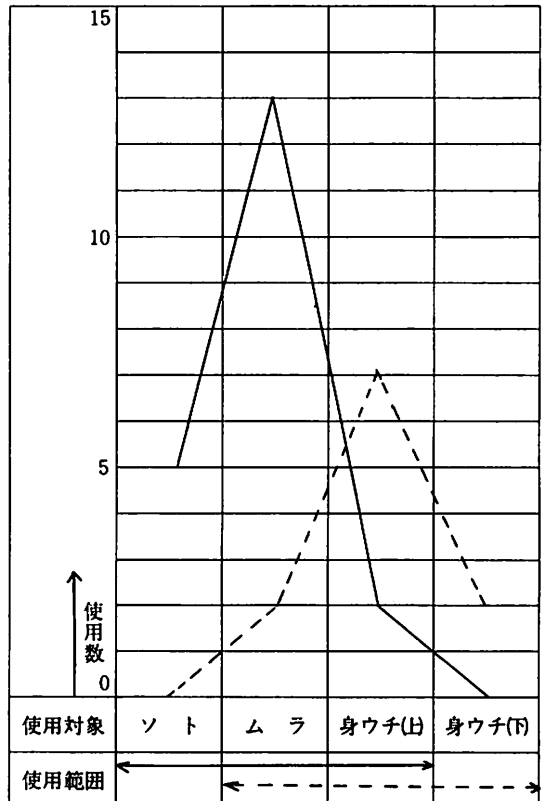
ように見える。それは、「サレル」の使用対象が、方言文例でみる限り、身ウチからムラの人に限定されているのに対して、「サイル」は、ムラよりソトにある人々に対しても用いられていることである。即ち次の様なものがある。

- (3) センセー キーサエーテモ ユーヨーナ コター ナカッタカラノー (先生が来なすつても言うようなことは無かったからね)。<嫁→姑>
 (4) ゼームショニ コリヨー ヤリサエータソ イネー (税務署の人が、これをやりなすつたのですよ)。<老男→老男>

こうした例文によれば、「サレル」よりも「サイル」の方が、高い待遇価を有しているように見える。そこで、「サイル」と「サレル」は、こうした待遇的意味の分担によって、異なる語形として認めなければならない可能性が生じる。

ところが、いま、「サイル」について、聞き手尊敬として使用される場合と、話題中人物に対する使用の場合とを観察すると、その使用対象に微妙な差異のあることが判る。「サイル」のこの差異をグラフにした。(図3)

図3 サイルの使用対象



説明) ①使用数は、サイルの使用例のうちその対象に対して使われたものは何例あるかを示す。

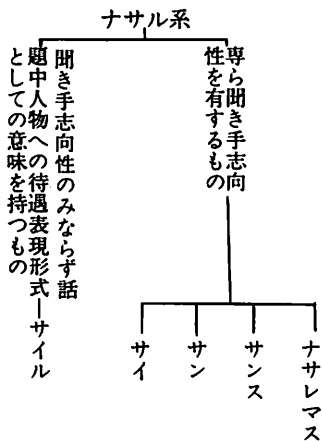
②——は、話題中の第三者に使用される場合、……は、対者に使用される場合を示す。

③使用対象で、ソトとは、村落共同体から除外される場所の、地主、お寺の奥さん、校長、見知らぬ紳士をさす。ムラとは、村人一般で、友人などをさす。身ウチ(上)とは、身ウチでありながら目上の、父、母、夫などをさす。身ウチ(下)とは、身ウチで目下の、息子・妻・嫁などをさす。

即ち、「サイル」が、ムラのソトの対象までカバーする時は、話題中人物に対して使用される時であり、聞き手尊敬として使用される時には、「サレル」と同様に、身ウチを中心とした使用が目立ち、最大限でもムラの者までを、カバーするものとなっている。これは、「サイル」の待遇価が変動するというよりも、既に諸氏が指摘されているように、実際の言語生活においては、対者に対する配慮が、大きなウェートを占めてくる故に、話題中人物に対しては、むしろ、低い待遇価を持つ表現形式ですますことになり、その使用対象が、話題中人物に対しては、ムラのソトの者にまで広がったものと考えられる。

こうみてくれば、この問題点も自然と解決されると思われる。

さて以上述べて来たナサル系助動詞を、その志向性により分類してみると、次の様になる。



この表から、話題中人物への待遇表現形式は、サイル形式で、ナサル系のヴァリエーションは、聞き手志向性を有するものに偏していることがわかる。

4. 2. 2 レル・ラレル系

「レル・ラレル」(代表形をレルとする)は、婉曲的色彩の濃いものと、そうでないものと2つの使用法が見られる。前者を、レル①、後者を、レル②とすると、その相異は、次の通りである。

| | 主語の明示 | 使用対象のウチ・ソト | 表現性 |
|-----|-------|------------|-----|
| レル① | × | ウチ | 婉曲 |
| レル② | ○ | ソト | 尊敬 |

また、それぞれの例文は、次の通りである。

レル①

- (35) ミナ ツメテ ユーケ ダサーレヨクチャーナー(〈イカを〉全部詰めて、たくさん出していたよね)。〈老女→老男〉
- (36) ムカチャー ヨー ハリョー コネー ナベデニラレヨクチャデショー(昔はよく針を、こう、鍋で煮ていたでしょう)。〈老男→老男〉

レル②

- (37) シブキサマー チュー ヒトガ オラレタ(渋谷様という人が、いらっしゃった)。〈老男→筆者〉
- (38) オーチシワ マキー デラレタ(大内氏は、真木に出られた)。〈老男→筆者〉

この2つの用法は、もう少し検討する必要があるが、資料に乏しく判然としないため、ここでは、この相異があることを指摘するにとどめる。

5. 2. 3 ヤル系

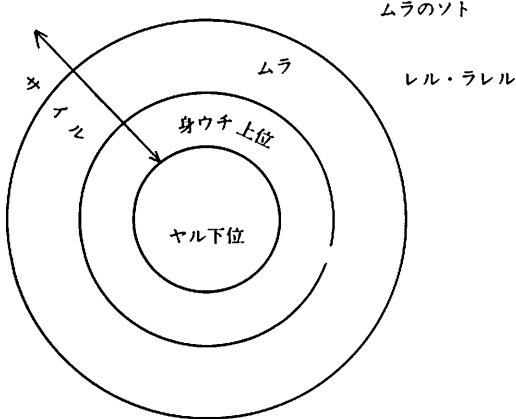
「ヤル」は、老年層に聞かれるが、中年層以下には、ほとんど聞かれない。使用対象は、身ウチに限られ、しかも話し手より下位の者である。土地人も、「ヤル」は良いことばではないと言う様に、待遇価は、かなり低いものようである。これを裏づけるように、方言文例では、「コンタ」という身ウチで自分より下位の者に対していう二人称の人称代名詞「コンタ」と呼んでいる。

- (39) コンター コレ クヤー(お前、これを食べなさい)。〈舅→嫁の設定〉
- (40) コンター ドコエー イキヤール カ(お前どこに行くか)。〈舅→嫁の設定〉
- (41) コンター イマカラ ドコエー イキヤール カ(お前、今からどこに行くか)。〈夫→妻の設定〉

(42) コンタガ アネー イヤールカラ イケン (お前がああいうからいけない)。〈男→嫁の設定〉

5. 2. 4 話題中人物に対する待遇

以上、尊敬法助動詞として分類されるものを、概観した。今ここで話題中人物に対する待遇をなすものについて少しふれておくと、次のようなことがいえる。即ち、サイルが、その使用対象において、身ウチの上位者からムラのソトまでの広がりを見せているのに対し、ヤルは、身ウチの下位者に限られており、しかも衰退途上にある。また、レルも、はっきりとした尊敬表現法としては、ムラのソトに限られており、日常それ程盛んではない。こうしたことから、現在は、まさに、話題中人物への敬意表現がサイルへ、一元化しつつある状況ということが、できるであろう。これを図示すれば次のようになる。



6. まとめ

以上、補助動詞的な要素と、助動詞的な要素による調査地区の尊敬表現をみた。その志向性から、これをとらえてみると次のようにまとめられる。補助動詞的要素については、それに当る5つの表現形式は専ら聞き手志向性を有する。助動詞的要素については、専ら聞き手志向性を有するものと話題中人物への待遇を意味する形式とがある。前者にはナサル系における4つのヴァリエーションがある。(表3参照) 後者としてはサイル・レル・ヤルの3者がみられる。このうち、話題中人物に対する待遇は、「サイル」で、ほとんどの使用対象がまかなわれ、レル・ヤルが、それ程さかんでないことは、4. 2. 4で述べたとおりである。これをまとめれば、聞き手志向性を有する表現形式の多さと、話題中人物に対する表現形式の少なさが浮かびあがる。これは、尊敬法として扱われるものが、志

向として、「聞き手」に傾いていることを、ものがたるものといえるであろう。

ただそうした聞き手志向のヴァリエーション創出の源が、2.で述べた地域性にあるのか、それとも、言語の内的なものであるかという点は、問題として残る。以上の記述では、その点がはっきりしない。ただ、4.2.1で述べた、サンの問題は、地域性を考慮に入れてみるのがよいのではないと思われる。即ち、補助動詞的要素において、地理的な要因によると思われる、ツカーサル、オクレル2系の併存状況は、結果として、多段階の聞き手志向の待遇表現形式を生んでいるが、これに応じて、ナサル系の聞き手志向のヴァリエーションが増加されたとみることも可能ではないかと思うのである。こうした点については、周辺諸域の体系を明らかにし、それとの比較から再検討したい。

引用参考文献

- 上田由紀1980『山口県下関彦島方言における待遇表現法』山口大学卒業論文
 岡野信子1969『山口県萩市方言の待遇表現法』国文学研究(5)
 岡野信子1979『くらしのことば』(『長門市史・民俗篇』所収)
 神部宏泰1975『中国の方言』大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語—日本語方言学概説』筑摩書房
 柴田武1973『地域社会の敬語』『敬語講座6 現代の敬語』明治書院
 辻村敏樹1968『敬語の史的研究』東京堂出版
 辻村敏樹1977『日本語の敬語の構造と特色』『岩波講座日本語4 敬語』岩波書店
 藤原与一1978『昭和と日本方言の総合的研究第一巻・方言敬語法の研究』春陽堂書店
 南不二夫1974『敬語の体系』『敬語講座1・現代敬語の体系』明治書院
 山口県文書館編1962『防長風土注進案19前大津宰判』
 長門市史編集委員会1979『長門市史・民俗篇』

(注1) 神部1975参照。[ai] 連母音について、当域には、この他に [e:] となるものもみられる。

(注2) 神部氏の掲げた図では、はっきりしないが、筆者の調査資料では、混在が認められる。

(注3) [ũi] は、一母音相当。

(注4) 南1974参照。

(注5) この表では、非特定要素として扱われるものは除かれることになる。当域では、非特定要素によ

るものとして、2.で述べたドナ・ナ・ノ・ネ・ノ
ンタなどの文末詞の選択によるもの、主格を示すこと
ガの使いわけによるものなどをあげることができる。

(注6) 二人称の人称代名詞とその使用対象の対応は、
次のようである。(表中の数字は、その人称代名詞
の使用数を示す)。

| 使用対象 人称代名詞 (二人称) | ムラの外 | | | | ムラ | | 身うち(上) | | 身うち(下) | | |
|------------------------|--------|------------------------|--------|----------------------------|------------------|---------------------------------|-------------|---|--------|--------|-------------|
| | 校 長 | お 寺 の 奥 さん | 紳 士 | 見 知 ら ね 若 者 | 村 の 友 人 | 顔 見 知 り の 若 者 | 父 ・ 母 | 夫 | 妻 | 息 子 | 娘 ・ 嫁 |
| アナタ | ← 3 | 3 | 2 | | 2 | | | | | | |
| アータ | | | | ← 1 | | | | | | | |
| アンタ | | | ← 2 | 5 | 7 | 5 | 7 | 2 | | 1 | |
| キミ | | | | ← 1 | | | | | | | |
| オーチ | | | | | ← 1 | | | | | | |
| オマエ | | | | | | | ← 4 | 3 | 3 | 5 | 1 |
| コンタ | | | | | | | | | ← 1 | 1 | 2 |

(注7) 話題中の人物Aが、話題中の人物Bに対して
話をする場合に、AがBに、「～テオクレ」という
ことは可能であるが、これは、ここにまた1つ話の
場が設定されるものと考ええる。

(注8) ツカーサイマセが、村人に対してつかわれる
ことはないが、オクレマセは、村人に対しても使用
されているものがある。ツカーサレは、対村人・友
人・身ウチのうち、村人・友人に多く用いられ、オ
クレは、身ウチを中心とした使用が目立つ。

(注9) 使用対象は、筆者となっているが、これは、
話し手が筆者を上位に待遇したというよりは、出迎
えのあいさつの場を強く意識した結果の使用と考
える。

(注10) 当域でよく聞かれる「アリマス」も [arima-

su] → [aimasu] → [æ:nsu] → [ansu] という音
変化を起こしており、[aimasu], [æ:nsu], [ansu]
のいずれかで、発音されることも多い。

(注11) 藤原与一1978, 神部1975など。

(注12) 逆に、「サイ」が、この「ナ」付加を可能に
するために「サン」に転じたとするのも一応可能か
と思われる。これを認めると、「サンス」と「サン」
がともに「ナ」を後接するというのは、サンス→サ
ンの根拠の1つとはできなくなる。

(注13) イは、断定の意を表わす助詞で、文末にお
いて用いられる。

付) この論文は、山口大学に提出した卒業論文(昭和
55年度)の一部に加筆したものである。

(東京都立大学院生)